

通信使・燕行使と近世東アジア

——呉允謙と黄床を中心に

程 永 超

日本史学専門 博士後期課程 2 年

I はじめに

朝鮮通信使¹⁾は、朝鮮国王が日本の江戸幕府に派遣した外交使節であり、壬辰倭乱により断絶した日朝外交が再開された1607（慶長十二）年から最後の使節が対馬に派遣される1811（文化八）年まで、合計十二回朝鮮と日本の間を往来した。朝鮮通信使の往来は、両国の中央政府（朝鮮国王⇄幕府將軍）の間で行われた直接交流であったため、それが持つ関係や意義は両国の政治・経済・文化及び相互認識等ほとんどすべての分野にわたっている。実は、朝鮮は日本に通信使を送るとともに中国に朝鮮燕行使²⁾（朝貢使節）も派遣して、三国の国際交流を結び、日本に清国の情報を知らせ、清国に日本の動向を伝えた。従って、通信使を論じる場合、当時の朝鮮と日本をめぐる国際的状況、及び朝鮮と日本の対外関係、とりわけ中国との関係を考慮し総合的に分析しなければ、全体像が見えないに違いないと思われる。

こういう国際情勢の中で、必ずしも多くはないが燕行使と通信使の両方を経験した「国際人」が現れた。従って、燕行使・通信使の両使節を体験した者が日本・中国、対日関係・対中関係をどのように認識したか、また日本情報や中国情報が双方へどのように伝播されていたか、比較検討することが必要である。本研究は、日本経験と中国経験の両方を持った、当時の東アジア世界の「国際人」を通して、近世朝鮮知識人の日本認識及び当時の東アジア関係を具体的に明らかにしたい。

本プロジェクトは博士論文作成の一環として、近世における燕行使と通信使の両方を経験した人を対象に、史料を網羅的に収集し、分析することが目的である。具体的な活動は下記のとおりである。

(A) 韓国ワークショップの参加

本研究における最初の活動として、5月30日～6月1日にかけて実施された。5月31日に韓国高麗大学で「燕行使と通信使」国際ワークショップに参加し、夫馬進先生をはじめ、燕行使と通信使の研究に携わっ

ている多くの学者達と交流した。

(B) 韓国におけるフィールドワーク

9月1日～9月8日に、韓国で史料調査をした。ソウルでは、韓国国会図書館、中央図書館、延世大学校図書館で資料を集めた。果川市の国史編纂委員会で史料調査をした。釜山では、朝鮮通信使歴史館、釜山博物館、福泉博物館、釜山近代歴史館、壬辰倭乱歴史館などの博物館を見学、倭館遺跡（現龍頭山公園）・永嘉台・東萊呂城・忠烈祠・子城台などの史跡を踏査した。

(C) 中国におけるフィールドワーク

9月9日～18日、22日～23日に、中国の北京、済南にて史料調査を行った。北京で、国家博物館・故宫博物院・首都博物館などの博物館を見学、国家図書館、北京大学図書館で朝鮮燕行使を中心に資料を集めた。済南では、山東省博物館・済南市博物館を見学、山東省図書館・山東大学図書館で資料を集めた。

(D) 中国にてシンポジウムの参加

9月19日～9月21日に、中国山東大学の「多文化視野の中の日本学」フォーラムに参加し、「洪啓禧の対外使行に関する考察—通信使と燕行使を中心に—」をテーマに口頭発表した。王勇教授をはじめ、日本東北大学文学研究科の院生たちと中国の学者達から貴重な意見をいただいた。

(E) 日本での史料調査

東京国立博物館、東京都立図書館、国立国会図書館では、朝鮮通信使との唱和集を中心に資料調査を行った。

II 先行研究

通信使中の燕行使経験者についての言及としては、李元植氏（1991）³⁾の指摘「日本を訪問した通信使の中には燕行使として中国に行ってきた人は15名に達した。例えば、1607年の正使呂祐吉を初め、1636年の従事官黄床、1643年の副使尹順之、1655年の正使趙珩、副使俞瑒、従事官南龍翼、1682年の副使李彦

表 通信使・燕行使の二重経験を持っていた三使

番号	氏名	日本使行			中国使行		
		年次	官職	使行録	年次	官職	使行録
1	呂祐吉 (1567-1632)	1607年回答兼 刷還使	正使		1596年朝天使 1614年陳慰使	正使	
2	慶暹 (1562-1620)	1607年回答兼 刷還使	副使	『海槎録』	1598年陳奏使	書狀官	
3	吳允謙 (1559-1636)	1617年回答兼 刷還使	正使	『東槎上日録』	1622年賀登極使（明）	正使	『秋灘東槎朝天日録』、『朝天詩（楸灘集）』
4	李景稷 (1577-1640)	1617年回答兼 刷還使	從事官	『扶桑録』	1629年問安使	正使	
5	辛啓榮 (1577-1669)	1624年回答兼 刷還使	從事官	『仙石遺稿』	1637年贖還使 1639年赴瀋副賓客 1652年謝恩使	副使	
6	任統 (1579-1644)	1636年通信使	正使	『丙子日本日記』	1643年赴瀋副賓客	左副賓客	
7	黃泉 (1604-1656)	1636年通信使	從事官	『東槎録』	1651年進賀謝恩兼冬至使	副使	『燕行詩』
8	尹順之 (1591-1666)	1643年通信使	正使		1640年問安使正使 1657年進賀兼謝恩三節年貢副使	正使 / 副使	
9	申濡 (1610-1665)	1643年通信使	從事官	『海槎録』	1639年昭顯世子瀋陽 1652年謝恩使副使	副使	『瀋館録』（1639） 『燕臺録（竹堂集）』（1652）
10	趙珩 (1606-1679)	1655年通信使	正使	『扶桑日記』	1651年謝恩使書狀官 1660年冬至使 1663年三節年貢使	正使	『翠屏公燕行日記』（1660）
11	兪瑒 (1614-1690)	1655年通信使	副使		1674年告訃使	正使	
12	南龍翼 (1628-1692)	1655年通信使	從事官	『扶桑録』	1666年謝恩兼陳奏使	副使	『燕行録』
13	李彦綱 (1648-1716)	1682年通信使	副使		1695年謝恩使	副使	
14	洪致中 (1667-1732)	1719年通信使	正使	『北谷録』	1727年冬至正使	正使	
15	李明彦	1719年通信使	從事官		1721年冬至使副使？ 1723年進賀兼謝恩三節年貢使正使 1728年謝恩使兼陳奏副使	副使 / 正使	
16	洪啓禧 (1703-1771)	1748年通信使	正使		1760年三節年貢使	正使	
17	南泰耆 (1699-1763)	1748年通信使	副使		1750年參核使	正使	
18	曹命采 (1700-1764)	1748年通信使	從事官	『奉使日本見聞録』	1756年謝恩兼三節年貢使	副使	
19	金相翊 (1721-1777)	1764年通信使	從事官		1765年謝恩使？	副使	

注1：この表は『同文彙考』『朝鮮王朝実録』『承政院日記』『備邊司謄録』『邊例集要』『通文館志』に基づいて作った。ひとつの使行については、少なくとも二つの史料で確認できることを原則とした。したがって、一史料でしか確認できない使行名については「？」を付して区別した。

注2：譯官のなかにも通信使・燕行使の二重経験を持つ者があるが（洪喜男、金指南、鄭昌周、吳大齡、李彦璘、金善臣など）、三使ではないので本表には含めない。

綱、1719年の従事官李明彦、1748年の正使洪啓禧、副使南泰耆、従事官曹命采、そして訳官の中にも洪喜男、金指南、鄭昌周、吳大齡、李彦瑱などが入っていた⁴⁾が最初である。上田正昭氏(1995)⁵⁾も「燕行使のメンバーの中に朝鮮通信使経験があった人が15名ほど入っている」と同じく指摘した。また張舜順氏(2008)⁶⁾は「(朝鮮後期)総35名の通信使三使の中で对中国経験をした人は15名いて、その中で正使が5名いた。三使の多くが通信使の前後に对中国使行などに参与した人物であった事実も注目に値する」と指摘した。

先行研究としては、以上の3人の指摘にとどまり、さらに掘り下げた研究は少ない。現在、通信使と燕行使の繋がりを意識しながら研究を進める唯一の研究者は夫馬進(2008)⁷⁾である。夫馬氏はこれまで燕行使と通信使が別途研究されてきたことへの反省を呼びかけ、燕行使と通信使の両使節が獲得した異国の学術情報が朝鮮でどのように交差したのかを明らかにし、明清・日本・琉球との国際関係の中で当時の朝鮮の学術状況を再検討している。しかしながら、中国・日本・韓国に散在した燕行使・通信使の史料を網羅的に分析し切れていないのが現状である。

以上の先行研究を踏まえ、『同文彙考』『朝鮮王朝実録』『備邊司謄録』『邊例集要』『通文館志』をもとに筆者が調査したところでは、通信使の三使(正使、副使、従事官/書状官)として直接日中両国使行を経験したのは17人に達し、また遠接使⁸⁾・伴送使⁹⁾・問禮官¹⁰⁾・世子左右賓客¹¹⁾など対中実務に携わっている人もまた2人いて、清朝中国と直接接触があった人は合わせて19人であった(表)。これは江戸時代通信使三使(総35名)の半数を占める。その中で、日本と中国両方の使行日記/詩文を残したのは吳允謙(1617年回答兼刷還使正使、1622年賀極使正使)、黃床(1636年通信使従事官、1651年進賀謝恩兼冬至使副使)、申濡(1643年通信使従事官、1652年謝恩使副使)、趙珩(1651年謝恩使書状官、1655年通信使正使、1660年冬至使正使、1663年三節年貢正使)、南龍翼(1655年通信使従事官、1666年謝恩兼陳奏使副使)の5人である。ほかに李鳳煥(?~1770)¹²⁾、金善臣(1775~1846)¹³⁾のように日中両国に行き来して記録を残した文人も少なくない。

Ⅲ 事例分析

以下では、徳川政権が成立した1603年から、対外

関係が安定するとともに固定化し始める1650年ごろまでの時期に限定し、吳允謙と黃床を中心に検討を進めたい。

1. 吳允謙(1617年回答兼刷還使正使、1622年賀登極使正使)

吳允謙(오윤겸, 1559(明宗14)~1636(仁祖14))は朝鮮中期の文臣である。本貫は海州、字は汝益、号は楸灘または土塘、諡号は忠貞。元和三年(1617)、彼は江戸時代二回目の回答兼刷還使の正使として、大坂平定の祝賀及び被虜人の返還のために来日した。壬辰倭乱の時捕らえられた男女321人を連れて帰り、この時から日本との修交が再び正常化した。この体験を彼の使行録『吳秋灘東槎上日録』¹⁴⁾『秋灘東槎朝天日録』¹⁵⁾に著した。また、1622年明の熹宗の即位を祝賀するための賀登極使として明に赴き、『秋灘海槎朝天日録』と『朝天詩』(楸灘集)¹⁶⁾を残し、その功で右参贊に昇った。1624年つづいて礼曹判書・知中枢府事を経て、1626年右議政に昇り、左議政を経て、1628年70歳で領議政に至った。仁烈王后(仁祖妃)の喪で摠護使として過労したあまり病をえて亡くなった。

①通信使行と燕行使行の相違

使行する前、吳允謙は燕行使行と通信使行の相違について、次のように指摘した。

【史料一】『光海君日記』一一四卷、光海君九年(1617丁巳/明萬曆四十五年)四月十一日(乙巳)
○回答使吳允謙啓曰：“(A)臣等此行、實出於不得已。而倭奴寇讎之域、與天朝父母之邦、情義不同。(B)赴京員役、雖齎持物貨、懋遷有無、固無所大害矣。臣等之行、如有挾貨商販之事、則非但使臣見侮、國家蒙辱、競利較詰、不無轉輾生事之患。自臣等行中、所當嚴飭禁斷。而萬有同行之人、顔情稔熟、似不足驚動其心。請依赴京搜檢例、發遣京官、臨乘船時搜檢、被捉之人、斷以潛商之律。臣等聞沿海水手、率多被虜而還者。若以此輩、充定船格、則此輩能通倭語、與倭相熟、渡海之後、經過許多館舍、留滯許多時日、不無潛相出入、漏通言語、惹起事端之弊。請令該司行會本道、凡被虜逃還人、一切勿定船格。”傳曰：“允。”(下線引用者、以下同様)

まず、気持ちの面の違いである。吳允謙は日本を敵の国、中国を親の国であり、感情的な面から言えば、通信使行と燕行使行が相当違っていると指摘した(【史

料一】(A))。周知の通り、当時朝鮮の外交体制は、日本との交隣関係だけでなく、清朝との宗属(事大)関係はもっと重要視されていた。従って、日本との情義は中国との情義とずいぶん異なっている。先を争って行く燕行使行と違い、通信使の任命はやむを得ず受け取り、心の奥底に日本に行くことを望んでいない。従って、通信使行中の何事に対しても慎重に扱わなければならない。

そして、燕行使と通信使のもう一つの区別は使行貿易(私貿易)の有無である。燕行使節団は、たとえ物貨を持って、貿易を行っても実に大きな害になることはない。しかし、通信使の場合、もしそういう商売をすることがあれば、使臣が侮辱を蒙るだけでなく、国家の侮辱に発展していく可能性が高く、しかも、利益でお互いに争ったりして揉め事に拡大される心配もある(【史料一】(B))。

燕行使の場合、清朝から使節団の貿易が認められていた。清朝の規定では、「各國貢使附載方物、自出天力、攜至京城、於頒賞後、在會同館開市、或三日、或五日。惟朝鮮・琉球不拘限期」¹⁷⁾とあるように、燕行使節団が北京で滞在する会同館において開催される開市があった。それに対して、朝鮮側の記録『萬機要覽』財用編五、燕行八包に、「國初、赴京人員帶銀貨、以為盤費・貿易之資。」とあるように、朝鮮王朝と中国の朝貢貿易関係が始まった当初から、中国に赴く使節団員は旅費と貿易の費用として銀を持参していた。即ち、中朝貿易は使行貿易という燕行使に付随した私貿易という形態で行われた。

それに対して、日本幕府は密貿易を禁止し厳しく統制した。日朝貿易は1609(慶長十四)年己酉約条で再開されてから、江戸時代を通じて日本と朝鮮における外交の実務と貿易は主に対馬藩が独占する。対馬藩は東萊府釜山鎮に倭館を開き、倭館に進上・公貿易・私貿易の三種の物品が積載されている歳遣船を派遣した。主に対馬藩民(日本側)と東萊商人(萊商)(朝鮮側)が倭館で貿易を行った。

②幕府の贈給銀の処理

吳允謙一行は1617(元和三・光海君九年)年7月4日出発、8月21日京都に着き、伏見城で將軍徳川秀忠と会見し、豊臣秀吉の朝鮮出兵により日本につれてこられた捕虜の帰国問題などを話しあった。そして、幕府から「銀子」をもらったが、吳允謙は固く断った(【史料二】)。

【史料二】『光海君日記』一二九卷、光海君一〇年

(1618戊午/明萬曆四十六年)六月二十五日(壬午)
○傳曰:“回答使處、關伯所贈銀子六千餘兩、方置于釜山館裏云。此銀、倭人萬無還持入去之理、或用於別人情、或用於營建之役、不妨。急速遣官、取來以用、使臣則自朝廷、酌施賞典、似宜。此意言于該曹。”【吳允謙等、還自日本、以倭人所贈銀、留館而回、倭送其銀于釜山、王命營建都監、取用。】

吳允謙一行は日本から帰って来た時、倭人がくれた銀を館所に置いて戻ってしまったが、倭人がその銀を釜山まで送ってきた。結局、朝鮮国王(光海君)はそれを使うように命じた。

実に、吳允謙は幕府から得た贈給銀を対馬藩に贈ろうとした。その理由は、通信使往来に際して対馬藩の費用があまりにも多かったからという。そして、対馬島主宗義成と対馬藩家老柳川調興が初めは喜んで受け取ったものの、数日後にまた返却したという(【史料三】(B))。

【史料三】『仁祖実録』九卷、仁祖三年(1625乙丑/明天啓五年)五月四日(辛亥)

○辛亥/上朝講《孟子》于資政殿。知事吳允謙曰: (A)“回答使贈給之銀、對馬島主以書送之。觀其辭意則好矣。(B)臣於丁巳年、奉使日本、還到馬島、棄其所贈而來。蓋使臣往來之際、馬島糜費甚多、故臣以此措辭給之。義成、調興等、初則喜而受之、未幾有還送之舉。(C)見其書契、則言辭甚遜、然國家似難區處、故使使臣處置矣。”上曰:“今亦須使使臣處之。當初使臣、無端棄置而來、似未盡矣。廟堂詳議善處。”允謙曰:“善爲措辭、還送其半可矣。”

これについて、吳允謙も『東槎上日録』に「還渡釜山日 洋中走筆示從事(釜山へ帰った日に海で筆を飛ばして従事に示した)」というテーマで詩文を残した。

扶桑海路八千里(日本へ行く海路が八千里という)

問子何能好往來(あなたは何の才能を持って無事に日本に行ってきたか)

王靈遠暢神明祐(王の威徳が遠くまで¹⁸⁾届いて神様が加護してくれたから)

兩袖清風自渡回(袖の中に澄んだ風のみを持って帰ってきた)

「兩袖清風」とは兩袖に賄賂なし清らかな風が吹き抜ける意味であり、役人が清廉であるさまを例える。

ここで、吳允謙は日本から何の贈給品も受け取らなく、全部断ったことを指す。

こうした吳允謙の態度はたいへん有名となり、150年を経た18世紀半ばの文人尹愷（1741～1826）は、『無名子集』¹⁹⁾で「讀吳楸灘事」をテーマとして以下のように書いた。「有記吳楸灘允謙事。日光海丁巳。爲通信使。關白例贈物及受公筆蹟者贖行白金累千。並置對馬島。以一柚子置袖中。及渡釜山。投海中。」つまり、幕府から得た「白金」を對馬に捨てて、一つのゆずだけを持ち帰ったが、それすら海中に投じて捨てたという。歴史的事実から離れて文学化してはいるものの、こうした表現になった背景には、やはり吳允謙の日本に対する蔑視観が読み取られていたものと考えられる。さらに言えば、彼の使行録『吳秋灘東槎上日録』には、随所「蠻」といったような言葉が見えることも指摘できる。

③外交ブレンへの道

1622年、吳允謙は賀登極使として明朝中国に派遣された。使行目的について言えば、『光海君日記』一七六卷、光海君一四年（1622壬戌/明天啓二年）四月三日戊辰条に、「調發兵糧等事、一一詳探以來、倘有我國冤痛之事、則以死明辨。」とあり、明の皇帝熹宗の即位を祝賀するためだけでなく、中国の政治情勢・地理などの情報を収集したり、朝鮮自身の立場について弁明したりすることである。

しかも、今回の燕行は以前と違い、陸路が後金により閉鎖されたので海路で明に赴いた。吳允謙もその功で右參贊に昇った。『光海君日記』一七七卷、光海君一四年（1622壬戌/明天啓二年）五月六日辛丑条に「史臣曰：“人臣事君之道、無過於忠。吳允謙兩朝一盡臣也。海路行役、人皆巧避、百般圖囑、必遞後已。而允謙最晚受命、少無懼色、乘槎日本、倭奴既服其清節、涉險登、萊、中國亦知其有人。雖古之忠臣義士、何以過此？人臣盡瘁之義、不當如是耶？”」とあるように、史臣も彼を「兩朝に仕えた忠臣」と高く評価した。海路での使行ということで、少なからぬ人が言葉巧みに任命を避けたのに対して、最後に任命された吳允謙は少しも恐れる気色がなかった。それは、船に乗って日本に行った経験があったからであり、困難が度重なった通信使経験は今回の中国使行に多大に役に立った。通信使の経験があつてこそ、吳允謙は登極使としての中国使行を順調に遂げたのである。この二回の使行があればこそ、以後における彼の昇進は確実となった。

しかも、吳允謙は、日本使行の前に（1609年）東

萊府²⁰⁾使（従三品相当）の経験があり、通信使を経験したあとも、日本関係の外交実務についてよく意見を聞かれたり、自分の意見を述べたりした。例えば、1624年三回目回答兼刷還使鄭昱の時も、同じく関白の贈給物の処理について議論があった。当時の正使鄭昱も関白の贈給物をやむを得ず受け取り、刷還の資として對馬藩に残したが、對馬藩はまたその銀を朝鮮に返した。朝鮮朝廷では、それをめぐって議論を重ねた。礼曹の意見では、半分をもらって東萊府が倭人のために使って、残りの半分はまた對馬藩に返して、回答兼刷還使の接待・刷還などの費用に使わせる²¹⁾。その時、吳允謙は前通信使経験を思い出しながら、半分ぐらい對馬藩に返したほうが良いと述べている（【史料三】(A), (C)）。

このように、燕行使と通信使の経験を経て、吳允謙は異国との接触経験を積み重ねることによって、対外関係処理に精通するブレンとなった。

2. 黄床（1636年通信使従事官、1651年進賀謝恩兼冬至使副使）

黄床（황호, 1604（宣祖37）～1656（孝宗7））、本貫は昌原。字は子由、号は漫浪。訳官で大科に登第する。注書になってからは、1625（仁祖3）年から数回直言で罷職されるなど官運は平坦ではなかった。1636年通信使の従事官として日本に赴き、日本見聞を『東槎録』²²⁾にまとめた。のち嶺南御史、禮曹佐郎、兵曹佐郎、戸曹參議、禮曹參議を歴任し、1648年大司成・大司諫になった。1651年議政府右參贊であつた彼は進賀謝恩兼三節年貢行の麟坪大君李滄²³⁾の副使として燕京に赴き²⁴⁾、『燕行詩』²⁵⁾を残した。『朝鮮王朝実録』の記事²⁶⁾から、彼が燕行に行ったときに「横額」を入手したことが分かる。また、文人である彼は、『漫浪集』を残した。そのほか、彼は接待官（1640）として清朝の使臣を迎えたこともある。

①柳川一件への認識

江戸時代初頭、對馬藩では李氏朝鮮と徳川政権との間の外交文書「国書」の偽造は幕府にも朝鮮王朝にも秘密裏に行われていたが、對馬藩家老柳川調興によって暴露され、いわゆる「柳川一件」である。1635（寛永十二）年3月11日、江戸城大広間に將軍徳川家光の前、宗義成と柳川調興の対決が行われた。結局、家光の親裁で宗義成は無罪、柳川調興は津輕に流罪とされた。国書改竄と直接関わる朝鮮も柳川一件にずっと関心を持っていた。柳川一件の定着直後に派遣された寛永度通信使の従事官として、黄床もこれに注目を

らった。一例を挙げると、10月25日一岐島で順風を持っていたとき、二人の被擄人が訪ねてきた。黄床は対馬藩の御家騒動について二人に聞いた。今世論で対馬藩主に罪があり、將軍の判決が不当で、これから何か起きるか分からないという（『東槎録』十月二十五日丙申条²⁷⁾）。將軍の親裁が下されたにもかかわらず、前述のように、世間に流言飛語が飛び交っている当時、宗義成もすごく不安である。『東槎録』²⁸⁾に宗義成の当時の気持ちをいきいきと描き出した。「是日聞有使者自江戸至。義成失色。」とあるように、江戸からの使者が来るたびに、宗義成は驚きすぎて顔が青くなった。手紙を開いて、結局「柳川一件」と関わらない事であった。三日後、黄床はまた直接宗義成と話しあい、宗義成自身も「今小人の生死がまだ決まっていない」（「小人此時生死未判。」²⁹⁾）と言った。

『東槎録』の一番後ろについている「聞見摠録」には黄床の「柳川一件」に対する認識が以下のように書かれていた。

「調興事顛末則大概調興爲人伶俐。付托左右。多行賄賂。與義成積成嫌。做出不測之語。誣毀義成。至於搆捏我國。無所不至。以從前書契。刪去年號。加書王字。添補禮單。日本送使。行禮庭中。偽造國書。傳致釜山。義成甘心辱國。朝鮮薄待日本等語。逐條告訴。相持累年。勝負未決。至乙亥衆論大發。執政以下諸將。皆調興之黨。大吹道春等。爲其領首。關白獨右義成。而平掃部大納言從而贊之。以調興構陷上官。斷爲罪案。竄于距江戸二十三日程。而其扶護之黨。至今紛紛。調興未死之前。義成之憂。無時可已。且義成爲人輕躁。其管下人如平成春輩。亦皆凡庸矣。」

すなわち、調興一件の経緯は大体以下のようである。調興は人となりが発で、左右に結託して賄賂を贈った。義成との憎みが積むにつれて、不埒な言葉を醸し出し、義成を誹った。我が国にもねつ造し、悪事の限りを尽くした。従来の書契で年号を消してしまい、「王」字を加え、禮單を補充した。日本が送った使者が庭の中で禮を行った。国書を偽造して釜山に送ったとか、義成が喜んで国を汚すとか。朝鮮が日本をなぞりにしたとかなどのことを逐一報告した。お互いに対抗して何年も経ったが、勝負がつかない。乙亥年（1635）になると、衆論が起き、執政以下の諸将がすべて調興の徒党であり、大吹頭・道春などがその首領となった。関白一人が義成を最良し、平掃部と大納

言もついて助けて、調興が上の官を陥れたと断定し罪案となり、江戸から二十三日程離れたところに流された。しかし、彼を擁護している群れが今さえずっと議論が百出し、調興が死ぬ前に義成の心配が止まらないだろう。しかも、義成の人となりはせっかちで、彼の管下の人、例えば平成春のような人はいずれも凡庸である。

黄床は実際に当事者の宗義成と接して、また日本の世論を集めたうえで、以上のような認識に達した。柳川一件の真相は朝鮮にとって大切であり、これからの対日政策と直接関わるものである。

②外交文書の格式をめぐる交渉

1645年に黄床は東萊府使となり³⁰⁾、日本との外交事務に携わることとなった。江戸時代、日本と朝鮮との間に朝鮮通信使だけでなく、対馬藩と東萊府との間に「訳官使」なども往来した。あるとき、禮曹回答書契が規定の格式（極行書³¹⁾）で書かれていなかったので、倭人が受けとらないという事件が発生した。黄床は速やかに書契を修正してまた日本に送ったという（【史料四】）。

【史料四】『邊例集要』上 卷六 三〇九頁

「十一月、府使黄床時、乙酉條第一船送使處所給禮曹回答書契、傳授於同倭、則開見而言曰、朝鮮・日本兩行、皆以極行書之事、前已講定、今此書契中、朝鮮・日本、書之於平行、決難受去云、同書契急速改書下送事 啓。狀錄、無回下。」

ところで、この事件の内容は『典客司³²⁾日記』には詳しく記される。礼曹書契の「極行書」と「平行書」をめぐる紛争が発生したが（【史料五】(A)）、黄床は最初にこれがたいしたことではないと考え、そうした立場で対馬の使者と交渉を重ねた。ところが、対馬側はすべての文書は江戸に送るからと、どうしても受け取らないので、やむを得ず修正することになったものであった（【史料五】(B)）。

【史料五】『典客司日記』仁祖二十三年乙酉（1645）十二月初五日条

「一、東萊府使黄床狀啓。本月二十八日、乙酉條特送第一船、正官一人、船主二人、侍奉一人、伴從七名等別宴、依例設行爲白遣。禮曹下送書契傳授、則渠等一一詳看、書契三道中、一道拈出而言曰、(A)朝鮮日本兩行、皆以極行書之事、前日已爲講定。今此書契二道、則如前例、一道則朝鮮日本兩行、皆以平

行書之，不敢受去是如爲白去乙。(B)臣始爲覽察，則果如渠之所言爲白乎矣。啓聞往復之際，恐有滯滯未及之患爲白乎去，此非大段差錯，不過偶未致察，仍爲受去無妨事，再三開諭。則渠等答以此等文字，皆送于江戸，一字之行，有違前例，則受去之人，必有重罪是如，終始不受爲白去乎。同書契一道，請令該院改書，急速下送事據，曹啓目粘連啓下是白有亦。今此第一船書契，承文院與他船書契，一體書送，而此則平書云，依渠所言改書以給事，不至大段，令承文院急急改書下送可如，行都承旨臣金光煜次知啓。依允，當該書寫官推考爲良如教。」

右の史料五で、以酏庵輪番制を論及した。柳川一件以降、京都五山の塔頭から碩学が選ばれ、輪番で対馬の以酏庵に派遣され、朝鮮との外交往復文書を取り扱った。以酏庵輪番の記録『本邦朝鮮往復書』は以酏庵・対馬藩庁・京都五山のそれぞれに保管される。ちなみに、1645（寛永二十一）年の時点では東福寺の周南円旦である³³⁾。

実は以酏庵輪番制について、黄床は日本に派遣されたときに、とくに知っていることに留意しておきたい。当時の以酏庵輪番僧である東福寺の棠蔭玄召がそれについて黄床に話したことがある。『東槎録』二月十九日己丑条に「此後往來文書。切宜慎重。如有可否之事。不必煩於文書間。只送差人相問。實爲合宜。近日則馬島往來文書一張一字。必送江戸。慮有道春等錯看執語。以爲生梗之地。」（これから往來する文書は非常に慎重にしなければならない。もし可否を聞く必要のある事なら、必ず文書にて書く必要がなく、人を送って直接聞く。最近対馬と朝鮮の間の往來文書を一枚一字も必ず江戸に送るので、道春などが見間違えて難癖をつけ、わずらわしいことを起こす恐れがある。）とある。という、日本に行った時に収集した情報は十年後にも役に立った。

③中国情報

明朝滅亡については、黄床が東萊府使であったときに、日本から最も早く情報を得た。

【史料六】『仁祖実録』四十七卷，仁祖二十四年（1646丙戌/清順治三年）正月二十六日（甲戌）

○時，我國不知明朝存亡，日本正官平成統來言：“大明送使，請甲兵五千來援，而日本於明朝，素無相交之義，不肯出兵。其使言：‘北京，河南，南京，淮西一半，浙江一半清人有之；山東，河西，湖廣，貴州，四川，雲南，山西，陝西，李自誠有之；大明

只有福建，廣，廣西。’云。”東萊府使黃床以聞。備局請通報於清國 上不許。）

このように、明朝皇帝逃亡の情報も日本側から聞いただけでなく、倭人から明朝使者の地図さえもらっていた。此の事について、『邊例集要』にも同じような記録がある³⁴⁾。

燕行使の派遣により、中国情報は朝鮮経由で日本に伝わるというメカニズムは学界で定着してきた。ところが、今回、明朝皇帝逃亡の情報は中国→日本→対馬藩→東萊府→朝鮮国王というルートで朝鮮国内に伝わってきた。ある面で言えば、日本は朝鮮にとって明清交替期中国大陆の最新情報の情報源であることが窺える。こうして得た情報をもとにして、朝鮮は軍隊を調達したり、配置したり、速やかに対応できた。当時の外交文書集『同文彙考』にその様子をも以下のように記載している。

【史料七】『同文彙考』一 原編 卷之三十六 請求 請免調送船隻咨

「據此前據議政府狀啓，節：“該先於本年正月二十六日，(A)據東萊府使黃床馳報，本月二十一日釜山倭館訓導張偉敏告稱，萬松院歲遣船出，來倭人說，稱明朝皇帝播越福建 漳州之間，送使于日本，請得援兵等。”節：“告乞施行得此擬合馳報等因。”具報。據此臣等竊照補運一事，既蒙大朝許免，則至如船隻理宜趁即調送。而第念上年運米時，船隻專辦於三南，兵船戰船亦皆調用脫有。邊警委屬可慮。(B)目今館倭口稱雖未委其虛的，倭情狡詐，有不可測。沿海防備，萬分緊急，若於此時調送許多船隻，則非但力未暇及，而所有邊情亦甚不細言。念及此，罔知攸措。臣等計議，得見有運粮官裴尙曾所領船二十餘隻，方在蓋州地方。以此隨便移用，而本國船隻乞免調送，以備南邊，實合事宜，合無備將右等情形移咨該部，允爲便益等因。具啓。據此，爲照當職守土無狀連歲飢饉，至於上年凶歉尤甚，補運之策，勢沒奈何。幸賴大朝垂愍小邦之凋弊，隨事曲恤，靡所不至，既免補運只調船隻，則其在小邦惟當感戴皇恩，惕念舉行之不暇。(C)而倭情之叵測，既如彼邊備之疎虞，又如此議。臣陳啓誠有所見，煩乞貴部曲諒，所據情節許免調送船隻，仍將裴尙曾所領船隻隨便移用，使小邦專意防範，不勝幸甚。爲此合行移咨，煩乞貴部轉奏，天聽明降施行云云。 順治三年二月二十四日 移戶部」（傍点引用者）

【史料七】(A)の部分は『仁祖実録』『邊例集要』と大きな違いがない。滅亡した宗主国の皇帝逃亡情報は日本から伝わってきたが、真実であったかどうかは把握できない。しかも、倭人がずる賢いので、計り知れないという（【史料七】(B)）。それにしても、黄床はこの情報に基づき、沿海の防備を強化しなければならないという提案を出した。

黄床が通信使として日本に行ったことがあり、東萊府使として長く日本人と接触した事があるにも関わらず、日本の状況は計り知れないという（【史料七】(C)）。どちらかといえば、日本は当時複雑な中国大陆情報を収集する一つの窓口として働いたことは明らかである。

IV まとめ

以上のように、本研究では、燕行使と通信使の関連性を意識しながら、中国・朝鮮・日本をまたぐ国際交流の様相を明らかにしたい。具体的には呉允謙・黄床を取り上げ、彼らの外交活動や対外政策決定過程の一端、及び彼らの使行を通じて中国と日本の情報が朝鮮にどのように伝わったかを解明した。そうした検討を通じて以下の三点が指摘できる。第一に、使臣の感情や使行貿易の有無などから通信使と燕行使に差異があった。第二に、使節への任命は、異国との接触経験を積み重ねさせることで対外関係処理に精通するブレーンを育成する政策の一環であった。第三に、十七世紀前半の通信使派遣は日本情報の収集だけが目的ではなく、明清交替による変動期中国の情報収集のルートとして日本を重視するものであった。

謝辞

今回のプロジェクトの実施に当たり、多くの方からのご協力・支援・助言・応援を頂きました。指導教官の池内敏教授には惜しめない指導をいただいております。末筆ながらお礼を申し上げます。

注

- 1) 以下、通信使と略す場合もある。
- 2) 「朝鮮燕行使」という表現は、李氏朝鮮王朝時代当時「燕行録」と総称された朝貢使節の記録の名から、研究者によって当該使節の総称として新たに造作された学術用語であり、史料上に現れる言葉ではない。以下、通信使と略す場合もある。
- 3) 『조선 통신사』 서울: 民音社 p. 86
- 4) 作者記。
- 5) 『朝鮮通信使: 善隣と友好のみのり』明石書店 p. 28
- 6) 「조선 후기 대일교섭에 있어서尹趾完의 通信使 경험과 영향」『한일관계사연구』제 31 집 (2008.12) pp. 89-132

- 7) 「一七六五年洪大容の燕行と一七六四年朝鮮通信使——両者が體驗した中國・日本の「情」を中心に」(特集 東アジア史の中での韓國・朝鮮史)『東洋史研究』67(3), 503-538, 2008-12
- 8) 清朝皇帝の勅使を国境の義州まで出迎える使節
- 9) 清朝皇帝の勅使を見送り、義州まで随行する使節
- 10) 中国の使臣がきたら挨拶を行って引導する人
- 11) 世子侍講院の正二品官職、世子と一緒に人質として瀋陽に行くこともある。
- 12) 1748年通信使書記、1760年燕行使伴尙
- 13) 1811年通信使一員、1822年燕行使随員
- 14) 『海行摠載』II (朝鮮古書刊行会編纂)に収録
- 15) 韓国国立中央図書館のウェブサイト参照
- 16) 『燕行録叢刊増補版』연행록총간증보판, KRpia
- 17) 『欽定大清會典 (嘉慶)』
- 18) ここで日本を指す。
- 19) 『韓國文集叢刊』
- 20) 朝鮮礼曹 (外務省) の出先機関
- 21) 『仁祖実録』9 卷, 仁祖三年 (1625 乙丑/明天啓五年) 五月一日戊申条。
- 22) 『海行摠載』V (朝鮮古書刊行会編纂)に収録
- 23) 朝鮮第16代王仁祖の三男である。1650年以降4回にわたって謝恩使として清に行ってきた。
- 24) 『孝宗実録』7 卷, 2 年 (1651 辛卯/順治 8 年) 11 月 4 日 (戊寅), 『承政院日記』孝宗 2 年 11 月 4 日 (戊寅), 『同文集考』一原編卷之十八 節使一を参照
- 25) 『燕行録叢刊増補版』연행록총간증보판, KRpia
- 26) 『肅宗実録』25 卷, 肅宗 19 年 (1693 癸酉/康熙 32 年) 2 月 7 日 (辛巳) 大司成權煥同入言: “明倫堂額, 乃朱子筆。黄床赴燕得來。而吳竣以爲, 明是朱子真蹟, 陳達懸揭。金益熙以爲。非朱子筆, 塗墨於板, 今宜改懸。” 上許之, 仍命廣搜神皇御筆以入。後玉堂白以廣搜不得。上命日後燕行覓來。
- 27) 二十五日丙申 陰風。留一岐島待風。有被擲人二名。一則全羅道樂安郡人曹一男。一則興陽縣人申天龍。來謁于臣所乘船。臣親見以問。天龍則已忘本邑言語。一男隨問隨答。頗言日本事情。未可信也。大概其言曰。對馬島主與調興相訟。雖得大君之力。至今安保。而大官諸將。多以義成爲有罪。大君決訟爲不當。前頭結束。未知如何。今請勅使以往。大君雖極喜悅。接待諸事。令沿路各站。加前盡禮。而小人聞平戶太守左右之言。今此勅使雖往。而安得每事盡善。義成生死尙未定云云。(後略)
- 28) 十一月初九日己酉条
- 29) 『東槎録』十一月十二日壬子条
- 30) 『承政院日記』仁祖 23 年 8 月 2 日条: 有政。吏批, 以黄床爲東萊府使
- 31) 極行とは文字の行の最上部。尊敬の意味で王の称号や事大外交文書などを作成するとき、相手を高めるため、文章を変えて、最初の文字を他のラインより高い位置に上げて記録することを言う。
- 32) 朝鮮後期礼曹判書所属の官署
- 33) 建仁寺両足院所蔵以酩庵關係史料による。
- 34) 『邊例集要』下 卷之十七 p. 484 丙戌 (一六四六) 正月, 府使黄床時, 倭人言, 明朝皇帝, 播越于福建・漳州之間, 方請援兵於日本, 而必聽許之理是在果, 明朝使者所持地圖倭人謄來是如, 訓導張緯敏, 持納地圖, 監封上送事 啓。無回下。